

2008 ティータイム通信

3



発行/

〒100-0001 (株) 住友生命保険貯蓄部

株式会社

みのりホーム

[E-mail] minor@minor-group.com



みのりホーム

[ホームページ] http://www.minori-group.com

[E-mail] minor@minor-group.com

Tel 089-976-0047

ホームページ更新中

[みのりホーム]と検索してください

社長 寺川 繁雄



新築注文住宅のお引渡が完了しました

K様邸



1月吉日、K様邸をお引渡しさせていただきました。会社で、現地で、何度も打ち合わせを重ね、ようやく完成しました。完成したものの一つ一つに至るまでK様と一緒に決めさせていただいたので、できあがった建物への思い入れは一人です。私たちの職人が一所懸命に建てたこの家で、ご家族がご健康で幸せな生活を送られることを期待しています。



外観は凹凸によってデザインすることを心がけました。飽きの来ないシンプルな色彩を基本に使い、石目外壁の凹凸と庇でアクセントをつけ、単調なタイルの外観を引き締めています。屋根の形は当たり前の切妻を棟違いにすることによって、スマートな印象になるだけでなく、小屋裏収納の採光と通風を確保しています。



暗くなりがちな2階の廊下には大きな吹き抜けに大きな窓を設けることで、光と風を淀む場所なく取り入れています。また、玄関に立ったときには明るい空間の広がりを感じることができます。調子の壁も豪華な吹き抜けにマッチしてオシャレ♪



K様邸は2/23(土) 10:40~11:10

陽あたり良好 (テレビ愛媛)でTV放送されます。

ぜひご覧ください!

快適な住み心地の追求 ~建築と医学を結ぶシックハウス問題~

「健康の危機が最も叫ばれている現代、当面の課題はこの酸化環境の中で、それらからいかに人間の健康、動植物、水資源を守り抜くかでしょう。

そのためには、地球や人間を還元する必要がある、その還元環境をもたらす強力なテクノロジーの一つがマイナスイオンである」と指摘しているのが、この分野の権威である菅原研究所の菅原明子所長です。

「シックハウスの原因であるホルムアルデヒド等のトータルVOC*はケミカルアレルギーを発症させますが、そのプロセスでは体内で顆粒球と言われる免疫細胞の中の白血球の一部が増え、これが活性酸素を吐き出します。

免疫細胞の中の顆粒球が、アレルゲンとして皮膚や吸気から体内に侵入した化学物質を異物と認め、分解しようと攻撃をかけます。つまり、攻撃爆弾が活性酸素なのです。

したがって、化学物質の多い家に住んでいると、アレルギーの症状がまず最初に現れます。大腸には腸関門というものがあり、その膜を通過できるのは水溶性の物質ではなく、油溶性のものだけです。

シンナーが脳の神経に取り込まれるのは油溶性だからで、化学物質もまた、シンナー中毒と同じような症状を起こし、非常に精神が不安定になり、奇声を発したりする状態になります。

住宅とケミカルアレルギーは非常に強いつながりがあるのです。

今まで医学と建築をつなげるものがなく、それぞれが別々に専門化し発達してきました。その間にアレルギーの人は10年間に2倍ずつ増えていきました。

免疫の攪乱、食品添加物などが原因だと解釈されてきましたが、それだけではないことが最近わかりかけてきたのです。むしろアレルギーや喘息は、住宅を改善することによってはるかに効率よく解決することができると思えるのです。」

しかし、ここまで自然環境が汚染されてしまった現在、それをもとのままの自然の状態に戻すことは非常に難しいと思われず。

それでは、どのようにしたらこのような悪環境と要因からくる病気を回避し、健康な身体をつくり、家族を守っていくことができるのでしょうか。

この続きはまた次号で…。次回は「マイナスイオンと住環境」です。

ライトスタッフ発行 家づくり・リバイブル冬号 巻頭

*VOC
(揮発性有機化合物)
常温で揮発する有機化合物のこと。
キシレンやトルエン、ホルムアルデヒドなどがあり、シックハウス症候群の一因と言われている。



社長の介護日記 ~再入院~



彼女が退院した9月上旬。その後ずっと夏日が続く。ところがエアコンをかけると「寒い」と云う。朝など窓からはいつてくる風にも反応して上着を羽織る。そして日中もそのまま過ごして脱ごうとしない。もっとも日中は彼女にわからない程度の弱エアコン状態にしているのだが、彼女の皮膚感覚は常人のそれとはかなり違っている。それでも「本人が快適ならそれでいいか……」と思いつつそのままの状態を続ける。

相変わらず失禁も多く、反応も鈍く表情もしっかりしない。

ある朝、あまり朝食も進まず元気のない彼女の状態が気になりつつ、ヘルパーさんに申し送りのメモを書

き出勤。

昼頃女房から電話、彼女が入院すると云う。

入院の手続きやあとの事は女房に任せて、私は仕事を続けたのだけど、よくよく考えてみれば、あれは熱中症かそれに近い状態だったのでないかと大いに反省させられた。

ここはゆっくり涼しくなるまで病院で養生してもらおう。



